HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	清水幾太郎忘れられた人気者の社会学　竹内洋『メディアと知識人清水幾太郎の覇権と忘却』（中央公論新社2012年）を手がかりに
著者	犬飼，裕一; INUKAI, Yuuichi
引用	北海学園大学学園論集(155): (1)-(15)
発行日	2013-03-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

清水幾太郎　忘れられた人気者の社会学

竹内洋『メディアと知識人　清水幾太郎の覇権と忘却』（中央公論新社、二〇一二年）を手がかりに

「驚いたことには、日ごと互いにおだてあうために小さなクラブに集まって、まったく勝手な裁きを押しつけている連中が、いったんそうした暴力のメカニズムが明るみに出されると、暴力だ、とわめいてみせるのです。」（ピエール・ブルデュー『社会学の社会学』、田原音和訳）

犬飼裕一

1．誰もが知っていながら語られない知識人

「知識人」という言葉がある。日本ではこの言葉と長らく結びついてきた岩波書店の『広辞苑』には、「知識・教養のある人」という素っ気ない定義がのっているだけである。ただし、それ以上の意味が込められて使われてきたのは事実で、「知識」によって社会全般に働きかける特定の人々をこう呼ぶことが多い。最も古典的な例は、フランスの作家エミール・ゾラ（一八四〇―一九〇二）であろうか。有名なドレフュス事件に際して「私は糾弾する（J'accuse）」と題する一文を一八九八年に新聞紙上に発表し、当時のフランス社会に蔓延していたユダヤ人差別による暴挙を告発した。「知識・教養のある人」が積極的に社会にかかわること、少し昔の知的流行語でいえば「アンガージュマン（engagement）」ということになるだろうか。フランスは、ジャン＝ポール・サルトル（一九〇五―一九八〇）の国でもある。ゾラとサルトルを結ぶ線を考えれば、「知識人」はかなり具体的な像を結ぶはずである。

知識人の中には、ある時期猛烈なまでの名声を博し、後にはそうではなくなったり、あるいは忘れ去られたりする者もいる。絶頂期には一挙手一投足が注目の的になり、日々刻々の発言をメディアが実況中継し、しかもそれが多大な影響を与える。ところが、何かのきっかけで名声が失墜すると、誰も見向きをしなくなったり、知る人ぞ知るといった存在になってしまったりする。二〇世紀に成立したメディア社会は、芸能人やスポーツ選手を君主や権力者に並ぶ存在へと押し上げたが、同時に特定の「知識人」もまたそれらに匹敵

する位置に押し上げてきた。知識を持った人々が人気者や権力者になる事態が生じ、人気者や権力を持った人々が「知識人」を自・他称するようになったのである。

しかも、この種の人々は過去の前例を学ぶことに熱心なので、サルトルがゾラに学んだように、次第に特定の型を作り出し、それに適応していこうとする。前例を尊敬する人々は、自分が前例に比べて何か特別な貢献をしたのかを常に考える。しかも、前例になかった貢献をしようと、さらに努力する。そして、しばしば極端に走る。

その上、知識人には他の類型の人々には少ない一つの特性がある。それは、文章（文字言語）で表現された内容に強い忠誠心を抱いているということである。文字言語というのは保存性が良いので、時間を経るごとに、模倣されるごとに、極端化していくという傾向にある。先行者に比べて地味な表現では、誰も見向きをしないからである。逆に言えば、人は文章（言語）を使って考えているのと同時に、特定の型の文章表現によって特定の様式に考えるように導かれている。つまり、過去の「知識人」が書いた本をたくさん読むことは、過去の知識人と似た考えを、よりたくさん抱くことでもある。しかも、先行者よりも印象的な表現によって「偉大な思想」をさらに定着しようとする。

「戦後」と呼ばれる時期の日本を代表する「知識人」の一人に、清水幾太郎（一九〇七―一九八八）がいる。社会学者でもあり、『社会的人間論』（河出書房、一九四〇年、後に角川文庫）や『社会学講義』（岩波書店、一九五〇年）、『社会学入門』（光文社、一九五九年）は同時代の代表的な教科書として長く版を重ねた。オーギュスト・コントの研究者、さらにはアメリカのプラグマティズムや社会心理学の専門家としても知られたが、一般向けには論壇のスター――代表的「知識人」――としての存在が大きい。

すでに一九三〇年代に活躍を開始し、戦争をはさんで著述活動はますます盛んになり、一九五〇年代の絶頂期には丸山真男（一九一四―一九九六）と並ぶか、それ以上の名声を誇った。守備範囲も驚異的で、史的唯物論や民族精神から、平和、ファシズム、再武装反対、メーデー、ソ連、中国、安保問題、さらには「核の選択」まで、いろいろな意味で多様な執筆活動を展開した。ただし、没後には急速に忘れられた点で丸山とは対照的である。

ところが、清水幾太郎の名前が完全に消滅したのかといえば、そうではない。一九六〇年代後半生まれの本稿の筆者の世代にとってもいろいろな形で心に残る著者であったのは事実である。個人的な読書経験を書くのをお許しいただくと、高校生の頃に読んだ清水幾太郎の『本はどう読むか』（講談社現代新書、一九七二年）は、背伸び盛りの少年の心をがっちりとつかむ一冊であった。現に、入れ替わりが激しい新書市場にあってこの本はまだ現役で版を重ねている。こうしてみると清水の実力は決して侮ることができない。もちろん、名著の評判が確立していた『論文の書き方』（岩波新書、一九五九年）もまだ新刊書店で入手可能である。さらに翻訳者としての清水がいる。E・H・カーの『歴史とは何か』や、マックス・ウェーバーの『社会学の根本概念』、ゲオルク・ジンメルの『社会学の根本問題』なども清水訳で広く普及しており、研究者を含めた大勢の読者が「名

訳」の世話になっているのである。

誰もが知っていながら、多くが語らない知識人、それが清水幾太郎である。分野を社会学に限れば、誰もが実は読んでおり、意識してきたのだが、主題として取り上げることはなかった。

この問題に、なぜなのかと問うことはたいして意味がないだろう。そもそも社会科学の領域で過去の日本の著者を主題的に取り上げることは、むしろ例外に属するからである。どのように評価するのかは別にして、清水幾太郎自身が外国学説の熱心な紹介者であったように、今日でもやはり外国の知名人の名前を掲げた研究が日本の社会科学の主流をなしていることは間違いない。

ただし、清水幾太郎には多くの同時代人にはない興味深さがある。それは「戦後」の社会の揺れ動きをそのまま反映するかのような清水の揺れであり、そのたびに生み出された魅力満点の著述をめぐる興味でもある。変転きわまりない人物はいくらでもいたはずだが、清水ほどの水準を維持した人物は少ない。誰もが知っていて、しかも誰もが世話になっており、実は誰もが魅せられてきた著者、そんな清水を主題として取り上げることは、「戦後」に社会学という学問がどう対応してきた上で避けて通ることができないともいえるかもしれない。

そんな課題に応えてくれる著作が近年刊行された。社会学者の竹内洋による『メディアと知識人　清水幾太郎の覇権と忘却』（中央公論新社、二〇一二年）である。この本は竹内が二〇一一年に出した『革新幻想の戦後史』（中央公論新社、二〇一一年）ともに「戦後」の日本の言論界を扱った社会学研究の成果である。一九四二年生まれの竹内にとって「戦後」は、みずからの世代を総括する課題であり、この本の「後書き」で書いているように、清水幾太郎は「いまをときめくメディア知識人の原型として、さらには戦後史を考えるうえでこれほど的確な人物はいない」（竹内、三四一頁）からである。

ここで若干方法論の問題に寄り道をすると、社会学は、「思想」や「思想家」に、哲学や思想、哲学史や思想史とは別の視角から取り組む。哲学者が他の哲学者の議論に取り組む場合は、肝心の哲学が優れているのか否かを問う。優れていれば賞賛し、着想を借用する。反対に欠点があると判断すれば批判し、問題が大ありだと考えれば非難する。欠点を補った新しい哲学や思想を構想すればよい。哲学者がよりよい哲学を求めるのは、家電メーカーがより良い家電製品を作ろうとするのと同じである。当然のことである。

これに対して、社会学はその種の判断をするのではなくて、特定の哲学や思想が登場してくる社会的な条件を問う。言い換えれば、社会学は当然の判断を保留して、その背景となる諸条件を問題にする。[1] たとえば、竹内洋は次のように書いている。

> 「本書は清水がなにゆえ知識人界の覇権を握り、にもかかわらずなにゆえ急速に忘れ去れた思想家となったかをつうじてメディア知識人の姿を明らかにしたいのだが、それは転向者や変節漢という通り一遍の清水論ではなく、なにゆえそういわれるようになったかをみていくことにもなる。」（竹内、三一頁）

清水幾太郎は、生前高い名声を誇りながら没後急速に忘れられた人物である。しかし、先に書いたように、今日でも不滅の貢献を多数残している。毀誉褒貶はあるにせよ、清水が重要な人物であった

ことは間違いない。そして、清水という重要人物がなぜ忘れられたのかというのが竹内の本の主題となる。端的に言えば、清水が思想家として偉大なのかだめなのか、良いのか悪いのか、価値があるのかないのか、あるいは清水が好きなのか嫌いなのかといった判断は棚上げにして、「清水幾太郎」という現象がどのような条件の下に生じたのかを問うのである。

ただし、通常とは別の視角から「思想」や「思想家」に取り組む社会学が気楽な立場で議論できるというわけではない。そもそも、社会学には一つの難問が宿命的に与えられている。それは、「社会現象とは何か」という一見自明でありながら、実は容易には答えられない問いである。人間が暮らす場がすべて社会であるならば、それはすべてであるともいえるし、そうでないともいえる。究極のところでは、それぞれの論者ごとに別々の「社会現象」が存在するということができる。しかし、もしもそうならば多くの人々に共有される問題としての社会現象というのは一体何なのかということになってしまう。すると、多くの人々が「優れた思想家」あるいは「高名な社会学者」、つまり権威者として容認している人物の判断に依存するということになる。

もしもそうならば、結局のところ、一旦棚上げにしたはずの通常の価値判断――良い思想家、あるいは家電メーカーがより良い家電製品を作ろうとすること――が形を変えて再登場しているだけになってしまう。多くの人々が共有している常識的な判断に依存するだけならば、社会学が特別な観点を提示していることにはならないからである。

ここから、社会学には一つの現実的な選択肢が登場する。それは、竹内がいう「一流主義」を捨てることである。

> 「思想家の研究でも一流主義が蔓延していないだろうか。もちろん一流の思想家には時代が経過しても変わらずくみ尽きぬ泉があり、多くの人がひきつけられるのはわかる。しかし、二流、三流の思想家の方が大衆や大衆インテリや時代の空気を知るにはよいという場合もある。」（竹内、二八頁）

清水幾太郎は、「一流主義」の対象とはならない。考えてみればずいぶんと過酷な判断を下しているものである。「一流」は時代を超えた普遍性を実現しているが、そうではない思想家は当人が生きた時代だけに通用する。時が過ぎれば忘れられる、それが「二流、三流の思想家」の定めであり、そうであるからこそ「時代の空気[2]」をそのまま表現しているというわけである。「時代の空気」というのを、「社会のあり方」と言い換えると、社会学にとってなじみのある問題に近づいてくる。

ただし、まだこれでも「社会現象とは何か」という難問が解決したわけではない。清水幾太郎の場合は他の多くの著者たち――思想家たち――とは別の事情がある。それは、清水が他ならぬ社会学者だからである。それどころか一つの時代を代表する代表的社会学者の一人であった。清水を二一世紀の今の視点から見て「二流、三流の思想家」と呼ぶことは不自然ではないとしても、そんな人物が「社会学」という学問を代表していたという事実をどう取扱うのかという問題が残ってしまうのである。

2．自己言及と悲喜劇

「社会学の社会学」という研究分野がある。特定の時代の社会問題を社会学がどのように論じていたのかを社会学的に研究する分野である。清水幾太郎を社会学者が論じるというのは、まさにこれである。その場合、研究対象とされる「社会学」は、特定の時代の性格が色濃く刻印されているほど都合が良い。「二流、三流の思想家」が活躍するのがここである。著者が死んで五十年たっても多くの読者が「現代の問題」を実感するような社会学の場合は、この点で不利である。清水がさらに好都合なのは、一旦確保した自分の立場に生涯固執するといった姿勢をとらず、むしろ「時代の空気」にあわせてどんどん立場を変えていった「転向者」「変節漢」だったからである。まさに清水自体が一つの社会過程だったといえる。

ただし、「社会学の社会学」は自己言及命題[3]を正面から扱うことでもある。「時代の空気」に応じて立場を変える「転向者」「変節漢」を研究する社会学者自身は、それではどのような観点から論じているのか。自分は転向や変節をしないのか。あるいは不動の姿勢で社会の動態を静観しているのか。転向者が変節者を論じたら議論はいったいどこへ向かうのか。糸が切れた凧のように漂う議論を理解するにはどうしたらよいのか。

自己言及の問題は、社会科学全般にとって危険を秘めている。従来、主流をなしてきた社会科学者たちが、自分自身も社会生活を送っている一員であるにもかかわらず、あたかも自分は無関係であるかのような態度で「社会」を論じようとしてきたのはこのためである。そうしなければ、特定の視点から一貫した議論を構築することが難しいからである。自分のことは棚に上げて議論することで特定の立ち位置を確保するのが主流の社会科学の流儀であった。

ただし、観点を変えていうと、自分のことを棚上げにすることをやめて自己言及の可能性に関心を抱く社会科学者もいる。糸が切れた凧が飛び去る様子にあえて注目して、めまぐるしい変貌に身を任せ、そこにこそ人間社会の本性を見いだそうとする。次々と起こる立場や視点の変動は、「転向」や「変節」と呼べばそうだが、「動態（ダイナミックス）」と誇らしげに呼ぶこともできる。

この種の社会科学者を観察していて毎度感じることがある。それは、彼らが自己言及の連鎖がもたらす目眩を催すような変転を、むしろ楽しんでいることである。たとえばフランスの社会学者ピエール・ブルデュー（一九三〇―二〇〇二）は大学世界の社会学的分析を行った『ホモ・アカデミクス』で次のように書いている。

> 「大学世界の社会学的分析というのは、私が自分の研究そのものの中で一貫して継続して来た、学問的実践についての批判的反省の到達点であるが、これは分類者の中の分類者たる「ホモ・アカデミクス」を、それ自身の分類の中に落とし込んでしまおうとすることに他ならない。これはペテン師がぺてんにかけられたり、水を撒く人間が水をかけられたりという、喜劇的な立場に他ならず、中には怖気づいたのか怖気づかせようというのか分からないが、ことさらにこの立場を悲劇的に受けとめる者もある。」（ピエール・ブルデュー『ホモ・アカデミクス』、石崎晴己・東松秀雄訳、藤原書店、一九九七年、九頁）

ブルデュー自身が大学人（ホモ・アカデミクス）の一員であることはもちろんであるが、そんな自己言及による「喜劇的な立場」を

当人が面白がっていることは間違いない。ペテン師がペテンにかけられ、警官が逮捕され、法律家が法律違反を問われ、経済学者が破産する。もちろん、社会学者自身の社会性を問う場合も喜劇のきっかけとしては十分である。「社会」についての専門家を自称する社会学者の社会性はいったいどうなのか。ただし、この種の喜劇はブルデューもいうように、人によっては悲劇的に受け取る場合がある。竹内洋は清水幾太郎の回想を引用している。

「私は、芸人という言葉の持つ悲しい響きを大切にしたいと思います。(中略)自分の歌や話がお客に判らなかったら、お客に楽しみを与えなかったら、お客を退屈させてしまったら、自分が生きて行かれなくなるのです。自分が生きて行くためには、是が非でも、芸を磨かねばなりません。芸というのは、見知らぬ人間の心の中へスルリと入って行く技術のことです。

この私にしても、まあ、一種の芸人なのです。ああ、笑わないでください。今は、売文や売文業という言葉は使われていませんが、フリーのジャーナリストというのは、元来、文章を売って生きる人間、売文業者という身分の低い貧しい芸人なのです。いつの間にか、芸人が芸能人という曖昧なものに仕立てられたように、近頃は、売文業者が誤って思想家などと呼ばれ、その責任とか使命とかが問題になっていますが、これは飛んでもない見当違いで、芸人にとって大切なのは意地だけです。」(竹内、三〇頁、清水『私の文章作法』からの引用)

ブルデューは喜劇ととらえ、清水にとっては悲劇となる。清水の文章をまとめるならば、メディア知識人(「芸人」としての「売文業」)とは、「お客」(メディア関係者と読者)に楽しみを与えることで生活する弱い存在(「身分の低い貧しい芸人」)なのである。個人的な解釈をくわえると、清水のいう「芸人」というのは、みずから何かを生み出すのではなくて、他人が作り出した秩序の中で、有力者の意図を汲んで生活する寄生者である。唯一生み出すのは、複雑な相互関係の中で辛うじて可能になる意味づけだけである。それを「価値の創出」といえば誇らしく響く。しかし、その「価値」が広く受け入れられ――「売れ」――て、人気者、スターの地位を獲得したり、維持できたりする保証は何もない。

考えてみればずいぶんと不安定な職業生活である。しかも、芸人の生活がまさにそうであるように、人気者になって高い名声と富を享受できるのか、どん底のその日暮らしに陥るのかは、全くの偶然も含めた複雑な条件が相互に関係した結果でしかない。しかも、「勝者総取り(Winner takes all)」が決まりで、ごく一部のスターが業界の資源のほとんどを手に入れてしまうという極端な不平等が当然のこととみなされている。さらに、一旦地位を確立した人物は、その地位にとどまろうとする。まさに清水がそうであったように、貴重な資源をできるだけ手放さないように八方手を尽くす。このため、新参者が地位を確立するのは難しい。

多少の深読みをするならば、清水の「悲劇」は、喜劇役者の内面といえなくもない。お客に笑ってもらうことで生活していながら、お笑い芸人も多くの人々と同じく苦悩や悲しみを抱えている。それは、ルッジェーロ・レオンカヴァッロの一幕オペラ『道化師』(一八九二年)の世界である。恋人の女優を寝取られた道化師は、自分の境遇によく似た芝居の場面で現実と芝居の区別がつかなくなり、恋人を本当に刺し殺してしまう。道化師の「名演技」に村祭の観客は大笑いして物語は終わる。それが専業の道化師ではなくて、「思想家」

として、「転向」や「変節」を非難される人物の場合、悲劇と喜劇の境界線はさらに意味深くならざるをえない。笑えない喜劇というものはよくあるし、悲劇として演じられているのが失笑を禁じ得ないということもよくある。

ただし、視点を変えていえば、喜劇とみなすにせよ、悲劇ととらえるにせよ、観客（読者）の求めるものを常に感じとりながら「芸」（執筆活動）を続けていくことは、それ自体として興味をそそる社会現象であることに変わりがない。喜劇は役者が自分自身に言及することで笑いを生み出すが、悲劇の主人公は思い通りにならない自分の運命を呪う。ただし、その一方で「メディア知識人」が日々努力しながら営業を続けていく業態はかなり明らかになっていくにちがいない。ブルデューは先の引用部分に続けて次のように書いていた。

「私としては、本書がその結果を提示している経験というのは、デヴィッド・ガーネットが『動物園の男』[4]と題する短編小説の中で主人公に実行させている経験とおそらくはそれほど違うものではないと思う。恋人と仲違いした若者は、絶望のあまり動物園の園長に宛てて手紙を書き、動物園にいない哺乳類を一頭提供しようと申し出る。つまり彼自身のことだ。かれはチンパンジーの隣の檻に入れられ、次のようなラベルが掲げられる。「ホモ・サピエンス。この標本はジョン・クロマンティー氏の提供になるものである。見物のみなさんは、個人的悪口などでヒトを怒らせないようお願いします。」」

（ブルデュー『ホモ・アカデミクス』、九―一〇頁）

ブルデューは動物園の檻に自分から入った自分を楽しげに想像し、「ああ、笑わないでください」と釘を刺す清水幾太郎は芸人の悲哀を語る。いわゆる「エスプリ」を尊重するフランス人と、悲劇偏愛の日本人を対比すれば、毎度おなじみの国民性論になってしまう。もちろんフランス人も日本人も多様で、正反対の嗜好をもった人物も多い。ただし、ここで重要なのは、自己言及がもたらす認識のゆらぎである。[5]

どこの国でも、自己言及は社会科学者が通常用いているのとは異なった語りの形式を必要とする。それは日本の社会学者の竹内洋が社会学者の清水幾太郎を語る場合にも、フランスの社会学者のブルデューが自国の大学人を語る場合にも共通する。自分とは無関係な「他者」を語る場合と、自分自身について語る場合とでは多くの条件が異なってしまうからである。

もちろん、ここにこそ他の社会科学に少ない社会学の独自性があることは、強調する価値があるだろう。アメリカの社会学者チャールズ・ライト＝ミルズ（一九一六―一九六二）が「社会学的想像力」について強調したように、社会学の認識の中枢には自己言及がある。ミルズは「離れて自分自身について考えること（think ourselves away）」によって日常生活を送る多くの人々には不可能な社会認識が可能になると考えた。[6]ミルズが考えていたのは一九五〇年代のアメリカ社会に暮らす「一般の人々」の「社会」であった。目を転じて、ブルデューや清水幾太郎が暮らす「社会」を考えるならば、「社会学的想像力」によって見えてくる事態は、自分自身を動物園の檻に入れて公開することでもあった。

さらにいえば、清水幾太郎が社会学者であることによって日本の社会学は自己言及を開始したと考えることもできないだろうか。

3．言葉に操られる人々

竹内洋の『メディアと知識人』にはもう一つの側面がある。それは、ピエール・ブルデューの知識社会学（知識人社会学）の応用例として清水幾太郎を分析するという側面である。ブルデューの仕事の意義は、社会における権力について語る言葉そのものが権力の装置であると、社会学の言葉を使って表現したことにある。[7] 先に書いたように、ブルデューは自己言及の危うさをあえて冒すことによって、従来の社会学とは異なった形で「知識人」と「知識」を論じた。

ただし、ブルデューの最大の魅力は、他の国の異なった時代の事例についてすら比較的容易に応用可能な分析枠組みを提供してくれたことにある。特に魅力的な造語の力はこの人物の身上と呼ぶべきものである。「文化資本」や「象徴資本」、「ハビトゥス」といった用語は、ある時期には「インテリ俗語」と呼びたくなるほど広く人文社会科学に普及し、いろいろな分野の人々が盛んに用いた。それが今日ではその種の流行も一段落し、入念な実地研究による成果が出てくる状況に至っている。もちろん竹内の研究もブルデューの分析枠組みを用いた成果である。

> 「清水は、たしかに旧制高等学校→東京帝大文学部卒の学歴エリートで、その限りでは知識人界の正系だったが、丸山真男（政治学者、一九一四―九六）のように、山の手階級出身ではなく、下町出身、丸山のように東大教授ではなく、ジャーナリスト（戦前）や私学教授（戦後）であった。丸山を正系的正系知識人とすれば、清水は正系的傍系知識人である。したがって、清水の言説を、正系的傍系が文化的正統派たるべく、自分の位置を高めたり維持したりしようとする無意識的あるいは前意識的な差異化戦略としてみていくことにしたい。その差異化戦略を、清水の知識人界における立ち位置に探ることにする。」（竹内、三三頁）

ブルデューと竹内の整理では、知識人は、1 学歴と、2 出身階層と、3 達成した職業上の地位の三つの基準で分類される。対比されているのは丸山真男である。清水が生まれたのは現在の東京都中央区東日本橋二丁目。当時は純然たる下町で、実家は竹屋を営んでいた。祖父の代までは幕臣旗本（清水の当人談では「四千石か五千石の大身旗本」）であったが明治維新で没落していた。ちなみに丸山真男の父は、長谷川如是閑と並ぶ対象・昭和期の著名ジャーナリスト丸山幹治（一八八〇―一九五五）であった。「知識人」として丸山は恵まれた二世であり、下町の竹屋の息子に生まれた清水は、すべてを自弁しなければならない社会階層の移動者である。その上、没落者を自覚している親からは「世が世ならば」といった言辞を聞かされて育っていたはずである。明治政府によって否定された旧勢力の子孫が、明治政府の知的象徴である東京帝国大学に学び、職人の親とは違う「知識人（インテリ）」を目指す。

ただし、清水は東京帝大教授になるという希望が挫折し、ジャーナリストになる。これに対して、丸山は戦時期の兵役で苦汁をなめた他は、かなり順調な知識人人生をおくる。清水が文学部の社会学講座の教授になる夢を早くに絶たれた一方で、一九一四年生まれの丸山は早くも一九五〇年に法学部教授になっている。東京大学の法学部と文学部の権威の違いを加味するならば、両者の意識の違いは想像に難くない。しかも、丸山の父親が政府批判で筆禍事件[8]に巻き

込まれたジャーナリストであったことは、二人の職業人生を比較する上で興味をそそる。

「メディア知識人」として、清水は一から地位を築く必要があったのに対し、丸山はすでに親の世代からの有力者なので出発点が違う。どのような業界にあっても、弱者である新参者は強者である既得権者の心証を害する危険を避けるのに対し、既得権者の一員として出発した人物は必要以上に妥協する必要が少ない。周りがすべて敵対者となりうる新参者と、ほとんど無条件に味方してくれる有力者に囲まれた世襲者の違いである。ただし、地位向上をねらう新参者は時に大勝負に出て既得権者の地位を奪い取ろうとすることがある。しかし、そんな不平等な出発点を、あたかも平等であるかのように説明するのが、大方の知識人でもある。多くの場合、既得権を守ることに人生を費やす人々は、もっている資源を総動員して既存の地位を守ろうとする。その際に有効な戦略は、不平等をあたかも存在しないかのように説明することだからである。

そんな知識人の世界について、ブルデューは「界 champ/field」という概念と用いる。特定の職業（社会的行為）を共有する人々の「相対的に自律したミクロコスモス」である（竹内、二一〇頁）。「界」を構成する大勢の人員には、当然上下関係（ヒエラルキー）があり、地位向上をめぐっての競争やそのための戦略が不可欠となる。

> 「界においては、なにが正統であるかをめぐっての競争があり、選別と聖別がおこなわれている。だから、界の要素である位置＝地位にはヒエラルキーがあり、中心＝正統（優勢の側）と周縁＝異端（劣勢の側）が生み出される。中心は、みずからの位置やその集団の覇権を維持・増強しようとし、周縁集団は中心にとってかわろうとする。「界」は、諸々の力から成り、「そうした力関係を変容させるための闘争界」である。換言すれば、界は正統派の地位の攻略という懸賞金をめぐるゲーム場である。」（竹内、二一一頁）

既得権をもった「中心」は防衛者で、失うものが少ない「周縁」は攻撃者・挑戦者とならざるをえない。既得権者にとって最良の結果は現状維持であり、そうではない人々にとって現状維持はいつまでも弱者や従属者の地位に押しとどめられている状態だからである。ここから竹内は挑戦者・周縁者としての清水幾太郎の人生を読み解いていこうとする。

挑戦者は常に「華々しい戦略」と必要とし、防衛者は「慎重な戦略」をとる（竹内、二一二頁）。挑戦者は自分の地位向上のために争乱状態を必要とする。防衛者はすでに手にしている利権を失う危険を避けようとする。挑戦者は派手な物言いで注目を集めようとするのに対し、防衛者は経歴に傷がつくような新規事業や長いつきあいの同業者の評判を落とすような批判は避けようとする。既得権をもった人々が平和を愛好するのは理由のないことではないのである。竹内は、丸山と対比することで、清水が生涯にわたって展開した極端から極端への振幅の大きな言論活動を説明しようとする。常に注目を集めていなければ、清水のような「傍系」「周縁」は、丸山のような「正系」「中心」に負けてしまうからである。言い換えれば、丸山のような人物は失うものがたくさんあるので、従来の行動をそのまま安定して続けていくほうが合理的だが、清水のような比較的失うものが少ない人物は通常のことをしていたのでは二流以下の人

物と見なされてしまう。メディア知識人として勝利することは、メディア世界とは別の大学世界の権威に挑戦することを意味したのだろう。

本稿の冒頭の議論にもどるならば、「知識人」というのは「知識」によって社会に働きかける人々である。彼らは言葉を操ることによって社会を動かそうとする。ただし、この種の一方的な「働きかけ」という発想が誤りの元でもあることは強調しておかなければならない。[9] 知識人たちは社会に働きかけているつもりになっているのと同時に、社会から大きな制約を与えられている。文章を印刷して発表する仕事をしばらく続けていれば誰でも実感するように、自分が過去に発表した文章はいつまでも残存し、当人を拘束する。「世評」という漠然とした言葉でしか表現できない社会的関係が当人を含めて複雑に構築されており、しかも時間を経るごとに強化される。たとえば、「高遠な学理に生涯を捧げる専門家」が、専門外の一般向けの原稿を書くのはためらわれるし、何でも屋といった調子の「フリーライター」が学会誌に投稿したり、学術書の専門出版社に原稿を持ち込んだりすることもありえない。このような例を挙げると、大学や研究機関といった組織に属して収入を保証されている専門研究者と、筆一本で生きて行くフリーライターでは経済的背景が違うという説明が、すぐに想起されるだろう。しかし、同じ専門研究者でも他の領域の仕事に手を染めることが少ないという現象は経済的背景では説明できない。むしろ、経済的背景がもたらす社会的地位の格差をも含めた人々の相互関係こそが、人々を特定の専門的な業務に固定していくのだと考えた方が、はるかに自然な理解を可能にするのではないだろうか。

とりわけ、メディア知識人はごくごく微妙な基盤の上に成り立っている存在である。メディア知識人は、メディアで人気を博さなければならない。大切に取扱われ、発言が各所で尊重されなければならない。有名な雑誌に投稿して高い評判を得るには、その雑誌に投稿し続けなければならない。もちろん実際には有力雑誌の編集者が定期的に原稿を依頼してこなければならない。新聞やテレビ、ラジオも同じである。何らかの事故を起こしてメディア業界の寵愛、ご愛顧を失うならば、落選した代議士のようなもので、明日からでも名声を失ってしまう。あるいは、狭い分野の知る人ぞ知るといった存在、「過去の人」の状態に陥ってしまう。株主や地主は逮捕されても株主や地主だが、メディアから「干された」メディア知識人はすべてを失ってしまう。しかも、すべて合法的で、排除した側のメディア企業が罪に問われることはない。人気の連載者を失うことは雑誌や新聞にとって経済機会の喪失であるかもしれないが、要するにそれだけのことである。著者やタレントが会社を相手取って訴えるなどということはありえない。

むしろ、メディア知識人はメディアの寵愛をなんとしても維持しようとあらゆる努力を払う。[10] 周知のように、メディアは知識人に自由に発言させているわけではない。まず第一に、企業としての出版社や新聞社やテレビ局に害が及ぶような発言は一切許さない。メディアにはそれぞれの方針があり、それに足しになる「教授」や「博士」の権威を必要にしているからメディア知識人に仕事が回ってくるのである。会社の方針に沿わない発言を繰り返す寄稿者や出演者

もお呼びではない。この点は、何かの事件をきっかけにしてメディアから撤退を決め込む丸山真男のような「東大教授」とは違う。

このように考えてくると、メディア知識人は言葉を操る人々でありながら、同時に言葉に操られる人々でもあることに考えが及ぶ。特定の言説がどのように生まれてくるにせよ、一旦普及した特定の決まり文句――言説――は、多くのメディア人、メディア知識人を動員して拡大再生産される。「悔恨共同体」や「無責任の体系」という言説が普及すれば、大勢の人々が声をそろえて合唱し、「もはや戦後ではない」という歌が流行れば皆が歌う。「安保反対」、「大学解体」、そして「核武装」という言説が一人歩きし始めれば、メディア知識人としてはすぐに駆けつけて唱和しなければならない。

ただし、ここで重要なのは、この種の付和雷同を指して「メディア知識人」を非難することではない。やるべきなのは、むしろ「メディア知識人」という類型の人々がどのような生態をもっているのかを、いろいろな角度から社会学として分析することである。さらに、特定の言説がこの種の人々によって拡大される仕組みを、清水幾太郎を事例として観察することであった。

4．POST FESTUM　～祭りの後で

喜劇にせよ悲劇にせよ、祭りの芝居はいつか終わる。「戦後」といわれる時代の「思想家」たちをかなり離れた世代から観察するとどのように評価できるだろうか。何より印象深いのは、和辻哲郎やさらに前の柳田国男、西田幾多郎のようにもっと古い世代の著者たちの著作が、今日でも多くの読者を持っているのに比べて、括弧付きの「戦後」を代表する著者たちが時間の経過とともに寂しい事態に陥りつつあることである。清水幾太郎の忘却の原因は当人の無節操な変節にあるのだといった評価がよくある。[11] しかし、一貫性を誇っていた著者たちも、熱狂的に支持した世代が老いていくと読まれることがなくなっていく。特定の時代背景を共有した人々にとっては充実した読書体験を実現するとしても、世代が変わればずいぶんと古くさい話になってしまう。なんでこんな本を多くの読者が読んで熱く語り合っていたのか、後になるとわからなくなってしまう。しかし、これは時間の経過だけからは説明できない。

おそらく鍵になるのは、「メディア知識人」という類型であろう。彼らはその時代に極度に特化した人物である。時代が変わると、敗戦国の紙幣のように価値がなくなってしまう。しかも、「戦後」はメディア知識人の存在感が以前よりもはるかに大きかったので、不注意な観察者ならば、「失われた世代」が生じてしまったかのような印象を抱きかねない。

ただし、ここで重要な問題がある。それは、「メディア知識人」という類型が決して日本だけの特殊現象ではないということである。一八八九年生まれのハイデガーと一九〇五年生まれのサルトルを比較するとよくわかる。ハイデガーが和辻哲郎と同じ年の生まれで、清水がサルトルより二つ年下というも興味をそそる。周知のようにハイデガーはヒトラー政権時代の行動の責任を長く糾弾されてきたし、和辻哲郎についても「戦争責任」をめぐる論評は繰り返し登場してきた。しかし彼らの著作は今でも多くの読者を持っている。ベストセラーとしてメディアが注目することはないが、一定の数の

人々が、影響を与えられたり、研究や評論を書いたりしている。高価で膨大なハイデガー全集が日本でも売られているのに対し、サルトルの全集は長らく絶版である。[12] そもそも日本はハイデガーの『存在と時間』の翻訳書が何種類も飽きることなく刊行されてきたハイデガー研究大国である。研究書や論文に至っては専門家ですら全貌を把握できないくらいである。これに対して、サルトルは往事の名声に比べて衰退が激しい。このように考えてくると、昔のメディア知識人が誇らしげに自称した「アンガージュマン」というのは何だったのかという問題につながる。メディア知識人が「アンガージュマン」をするには、メディアの寵愛を維持しなければならなかった。

すると、メディア知識人というのは知識人というよりもメディア人なのだという、素直に考えればごくごく常識的な判断に行き着く。メディアの多次元での移り変わり――伝達される情報の変化と、企業としてのメディアの消長――に呼応して、「売れる」人物と「干される」人物が交錯し、いつまでも人気者であろうとするならば持ち前の市場調査力で業務転換をしなければならない。もちろん、それをあきらめて大学その他の本業に戻ることもありうる。

ただし、「戦後」と呼ばれた時代と今日ではメディアとメディア知識人をめぐる状況も大きく変わっている。何度も繰り返された「……ブーム」が次第に小規模になり、「活字離れ」が深刻そうに語られる一方で、インターネットを媒介とした紙を用いない「活字」は盛況である。メディアに登場する「識者」の嘆きとは別に、「思想」をめぐる特定の専門分野の研究水準がこの数十年のうちにかなり深化しているのも事実である。そもそも情報量が格段に増えている。こうして考えてくると、「戦後」と呼ばれる時期に異常なまでの社会的影響力をふるっているように見えたメディア知識人のあり方こそが、歴史上例外的だったのではないのか。

それはメディア企業の大規模化と特権化・独占化に歩調を合わせて成立した知識と知識人の特殊なあり方だったのではないのか。そして、それがインターネットに代表される「情報革命」によって多元化され、要するに昔の状態に戻っただけなのではないのか。個人的でずいぶんと乱暴な推測を述べさせていただくならば、特定の社会に人文社会科学が扱う「思想」や「知識」に特別な関心を抱く人々の人口比はたいして変わるものではない。どんな時代でも教師は「今の学生は昔より勉強しなくなった」と主張する一方で、肝心の「昔」の人文社会科学の水準が今よりも際立って高かったわけではないのと同じ理屈である。何時の時代にも抽象的な理論を探求することに好奇心や歓びを覚える人は一定割合いるが、劇的に増えることもなければ、消滅することもない。むしろ少数者が互いに参照し合いながら自己産出を繰り返す「思想」が、たまたま特定の特権メディアの取り上げることとなり、それがあたかも国を挙げての大運動であるかのように思われていたにすぎないのではないのか。

もちろん誤解されては困るのは、たとえ少数者のみが関心を抱くにすぎないとしても、それをもって価値が低いなどと考えてはいけないということである。むしろ、多数の人々が支持しているかどうかいった基準であらゆる知識を評価するような、そんなテレビ局の視聴率競争のような発想そのものが、一つの時代の遺物なのではないか。視聴率獲得競争はメディア企業に任せておけばよいのではな

いだろうか。

このように考えてくるならば、社会学者である清水幾太郎という社会現象が社会学としていかに論じられうるのかという自己言及的な問題を再度考えることができる。本稿では先に、思想史と社会学の方法論場の違いに触れてきた。竹内がいうように「二流、三流の思想家」の方が社会学の対象としては論じやすい。思想史にとっては古くさくて退屈な昔の知名人の書いたものも、背景となる社会を理解するには、新鮮な素材に満ちているといえる。後の時代の人々が読めば、知的な批判というよりも下品な罵詈雑言であるようにみえる論評が、同時代の人々にとっては時代を代表する知的良心であるとみなされていたなどということもある。時代がかった陳腐な決まり文句でも、当人は時流に抗して一人木鐸を鳴らしているつもりであったなどということもある。そんな同時代の「大衆や大衆インテリや時代の空気」が当時のまま保存されているのが、いまでは大方絶版になった「二流、三流の思想家」たちの本なのである。

実は、本稿を執筆することを思い至った原因は、竹内が清水による知識人批判について次のように書いているからであった。

「これは六〇年安保闘争までの知識人を批判したものであるが、放った矢は清水自身に戻り、ブーメラン効果をもたらす。このような清水の予言者＝知識人批判は、自己を抜きにした論説というよりも、自己を準拠としたリフレクション（自己言及による反省）とみなすことができる。」（竹内、三三六頁）

社会学者清水幾太郎が「メデイア知識人」を批判することは、結局自分自身を批判することである。他人に投げつけたブーメランは、自分のところに戻ってくる。しかも、社会学者として清水幾太郎はそのことを痛切なまでに自覚している。これはまさに、はっとさせられるような読書経験であり、「知識人」をめぐる社会学は自己言及の問題なくして考えることができないという年来の問題意識には、すでに大きな先行者がいることを実感した。竹内もブルデューも、自己言及の問題に敏感な社会学者である。もっと正確にいえば、社会学という学問自体が高度に自己言及的であり、それどころか「社会」について論じることそのものが本来自己言及的なのだということを自覚している。

おそらく清水幾太郎の感性は、それを「芸人」の悲劇と感じたのだろう。竹内は「芸人」の悲哀に哀れみを抱き、ブルデューは喜劇としてとらえる。もちろん、どれも妥当である。しかし、自己言及は単純な自己省察にとどまるものではない。むしろ省察（リフレクション）が連鎖して、見渡しがたい相互関係の網の目が広がる。さらにいえば、自己言及が互いに連鎖し合うことで「思想」という特殊分野が成立し自己産出されているのではないだろうか。

そんな特殊分野が、他の領域に優先し、一方的に命令を下しているかのように思われた時代は、過ぎ去っている。もちろん、このことは「社会」と「思想」、あるいは「知識」の関係を考える上で多くの示唆を含んでいるのである。

（二〇一三年二月一日）

1　とりわけ知識という現象を扱う社会学の場合、一層困難で、しかも古くからある思想史との間で緊張関係に陥る。思想史は偉大な思想家

の歴史である。登場するのはデカルトやヘーゲルのような人々であり、今でも大勢の読者を獲得している昔の著者たちである。ただし、この種の人々が特定の社会を代表するのかというと難しい。たとえば、デカルトを論じることで一七世紀のフランス社会を論じたことになるのか。むしろ、デカルトのような人物は例外的な存在で、当時の主流の考え方とは異なった主張を続けていた人物であり、そうであるからこそ度重なる迫害を受け亡命先のスウェーデンで客死したのである。特定の時代背景や社会情勢に適応しているという点では、むしろ、デカルトよりも、デカルトを異端視し、迫害した当時の多くの人々の方がふさわしいと考えられる。社会学は特定の社会にこそ関心を抱くからである。

2　竹内洋は『革新幻想の戦後史』で次のように書いていた。

「しかし、戦後史と言っても経済史や政治史など多面的である。そのなかでも自分にとって一番気になるものを解き口にしたいと思った。それが「革新幻想」という「進歩的」思想と、それを焚きつけた雰囲気や背後感情だった。「革新都政」とか「革新知事」と言われたときの「革新」である。

というのも、わたしたちの世代、たぶん一九七〇年あたりまでに大学に入学した世代にとって、革新幻想はキャンパスの空気（世論）そのものだったからである。……」（竹内洋は『革新幻想の戦後史』、中央公論新社、二〇一一年、ⅳ頁）

ちなみに「空気」という印象的な用語法が日本の著述世界に定着するきっかけになったのは、山本七平（一九二一―九一）の『「空気」の研究』（初版、一九七七年）であるといわれている。ただし、この世代の日本の著者に特有の強固な自意識（とその反面の無知）のために「空気」をもっぱら日本人と日本社会の特有現象であるかのように論じていたのは残念である。

3　自己言及命題は自然科学を中心とした通常の科学論では無効であるとされる。端的に言えば、「私は嘘を言っている」という命題は論証不可能であるだけではなく、そもそも論証しようとすること自体が無意味だからである。ただし、人文社会科学にあって自己言及命題がすべて無効で、排除されるべきなのかといえばこれはむずかしい。もちろん、このことが人文社会科学が「科学」であるかという昔からの論題につながっていくことはここでくりかえすまでもない。

4　David Garnett, *A Man in the Zoo*, 1924. 日本語訳は『ガーネット傑作集1　狐になった人妻、動物園に入った男』、池央耿訳、河出書房新社、二〇〇四年に収録されている。ガーネット（一八九二―一九八一）はイギリスの作家で、いわゆる「ブルームズベリー・グループ」の一員であった。ブルームズベリー・グループは、ヴァージニア・ウルフらによって一九〇五年頃にケンブリッジで結成された学生グループ、後に知識人集団で、平和主義や左派自由主義を信条とした。経済学者のジョン・メイナード・ケインズも一員であったことは有名である。ブルームズベリー・グループが興味をそそるのは、当初から権力や権威を笑いものにする嗜好が強くみられることである。その代表例が一九一〇年の「偽エチオピア皇帝事件 Dreadnought Hoax」である。バージニア・ウルフら当時大学生だったメンバーが、偽エチオピア人の扮装をして「皇帝の使節団」を名乗り、お召し列車を仕立てて軍港を訪問し、イギリス海軍の軍艦に乗り込んで盛んな歓待を受けた。後に、当人たちがことの詳細を新聞に投稿したことで大きな社会問題となったが、海軍の面目がつぶされた反面で違法行為はなく、「犯人」たちが罰せられることはなかった。恵まれた社会層に属するエリート学生の悪ふざけととらえることももちろん可能だが、巨大組織である軍隊を堂々と嘲笑する知識人集団がイギリスにいたということは記憶されてよいだろう。しかも、相手は大英帝国の絶頂期に帝国の軍事力を代表する誇り高いイギリス海軍だったのである。ドイツ文学者の種村季弘はこの事件を取扱った著書で次のように書いている。

「贋エチオピア皇帝事件は、いわば完全犯罪だった。一味の誰かが口をすべらせなければ、何者の仕業ともしれぬ、宇宙人の道化役者一行が空の彼方から舞い降りてきて一場の笑劇を演じたあと忽然として消え去ったとでもいうような趣きの、奇々怪々な出来事として記憶されたはずである。……」（種村季弘『詐欺師の楽園』、河出文庫、一九九〇年、二九頁、初版、学林書林、一九七五年）

5　視点を変えれば、悲劇と喜劇の違いは物語の求心力の違いにある。悲劇の特徴は、あらかじめ決められた結末に向かってすべてを動員していく求心力にある。これに対して、喜劇は突然降りかかってくる遠心力によって笑いを実現する。ほんの少しの意識の食い違いが拡大し、予想外の結末がやってきて観客の笑いを誘う。最初に与えられた本筋の物語が一貫して続けられるのが悲劇であり、状況によってあちらこちらに拡散していくのが喜劇である。

6　チャールズ・ライト＝ミルズ『社会学的想像力』、鈴木広訳、紀伊国屋書店、一九六五年。

7　ブルデューの議論については拙著ですでに論じたのでここでの詳論は避けたい。拙著『方法論的個人主義の行方』、勁草書房、二〇一一年、二〇六頁以下。

8　一九一八年の「白虹事件」。大正デモクラシー期、急進的な論調で知られた大阪朝日新聞が掲載した「米騒動」事件をめぐる報道が、当時の寺内正毅内閣による言論統制のきっかけとなった。結果、丸山幹治と長谷川如是閑らが同紙を追われることになった。事後、大阪朝日新聞は政府批判を控えるようになる。白虹事件は太平洋戦争後、「権力に抗した日本の新聞人」の記憶として高く評価されるようになり、このことが息子である丸山真男の経歴に役立ったことは理解しやすい。

9　独立した個人が同じく独立した実在としての「社会」に一方的に働きかけるという古くからの想定が、社会学だけではなく広く社会科学全般に悪影響を及ぼしてきたことは、拙著『方法論的個人主義の行方』でいろいろ形を変えて論じたのでそちらに譲りたい。

10　まったく関係のない分野の文献に言及することになるが、メディアに登場する「識者」について、神門善久『日本農業への正しい絶望法』（新潮新書、二〇一二年）に面白い説明がある。日頃メディアとメディア知識人の農業談義に苦言を述べている神門はメディアに登場する機会などほとんどないが、ある種のブームが起こって人手不足になると呼ばれることもある。そんな少ない機会をとらえて「識者」の世界を観察すると、彼らには独特の病気がある。それを神門は「マスコミに出続けたい病」と呼ぶ。この種の人々は、「「識者」としてテレビやラジオに出ると、快感になってまた出たくなる」。

「そして、「マスコミに出続けたい」という希望を実現する方法はある。一度、マスコミと縁ができると、政界や財界や官界のトップが持っているような情報を持ってきてくれるからだ。そうなるとますます「識者」らしくテレビやラジオで振舞えるようになる。マスコミのほうとしても、自分たちの意図したような意見を「識者」に言わせることができるから安心だ。」（神門、六八頁）

大学の教員や研究機関の研究者は日頃狭い研究領域を扱っている人々である。専門家といっても近接領域について何もかも知っているわけではない。ただし、テレビやラジオでは会社の制作スタッフが事前に番組を制作してしまっているので、「識者」はそれらの情報をもらって、「私は何でも知っています」という表情で語ることができる。その場合、自分のこだわりで制作スタッフに反論などするよりも、便利な先生という役割を果たしていた方がはるかに好都合なのである。この結果、昨日まで原子力発電の安全性について熱弁をふるっていた「識者」が、事故をきっかけに危険性について真顔で警告するようになる、とは、神門がこの本の後書きで書いていることである（神門、二三四頁）。

11　通常の著述以外に古典の良質の翻訳を残してくれた清水は、むしろ寿命の長い著述家の部類に属するはずである。しかも、新書のいくつかは今でも版を重ねている。

12　書籍通販サイト「アマゾン・ジャパン」および「Honya Club」において、二〇一三年一月三〇日時点での状況。
http://www.amazon.co.jp/
http://www.honyaclub.com/